

第4章 まとめ

第1節 奈良県内出土の黒色土器

図33は、井戸跡2, 3から出土した黒色土器のうち、実測が可能であった12点の出土位置を略図で示したものである。

井戸跡2の掘方上層の埋土からは、A類の椀2点、B類の椀2点、土師器椀1点、土師器杯1点が出土した。さらに、下層の井戸枠外板の埋土からは、A類の椀1点と、B類の小形椀1点が出土した。次いで、下層の上段楕円形曲物井戸枠内では、A類の椀4点と、土師器小皿1点、土師器高台付皿1点が出土した。下段円形曲物井戸枠内からは、B類の椀1点と、土師器小皿1点が出土した。井戸跡2に先行して掘られた井戸跡3は、下層からA類の椀1点が出土した。以上のように上層から下層を通じてA類とB類の混在が認められた。このことは当時、A類とB類の併用を物語っている。また、井戸跡2, 3から出土した黒色土器は、細部の特徴に多少の差異はあるものの、器形をみると底部が狭く、体部が底部脇で角張り、外開きに延びる形態で、一応の統一性をもっている。年代決定は共伴した土師器小皿と、高台付皿によっても10世紀末から11世紀初頭に求められるが、この時期の黒色土器は、A類およびB類ともに前述の器形形態をもつと考えられる。

こうしたA類とB類の共伴と、器形形態を主眼において、奈良県下の8遺跡10遺構の資料を集めみた。幸いにして8世紀末から11世紀末までの資料が揃い、器形変化を知ることができる。以下、時代別に遺跡と遺物を記述する。

8世紀末から9世紀初頭 前栽遺跡 井戸跡4 (図34 1・2)

詳細は本文中30頁から33頁を参照。

9世紀前半 丹切古墳群34号墳 (文献1)

後世の追葬、あるいは供養によって埋納されたものである。A類の椀4個(3~6)、とB類の椀2個(7・8)のほか、東海系産の須恵器平瓶とが3組に重ねて置かれていた。A類4個体は、細部では異なっているが、手法はすべて同じである。炭素吸着は内面と外面の口縁部で、内面には横にヘラミガキがあり、底はタテのミガキがある。B類の(7)は鉢形であるが、内外面とも炭素

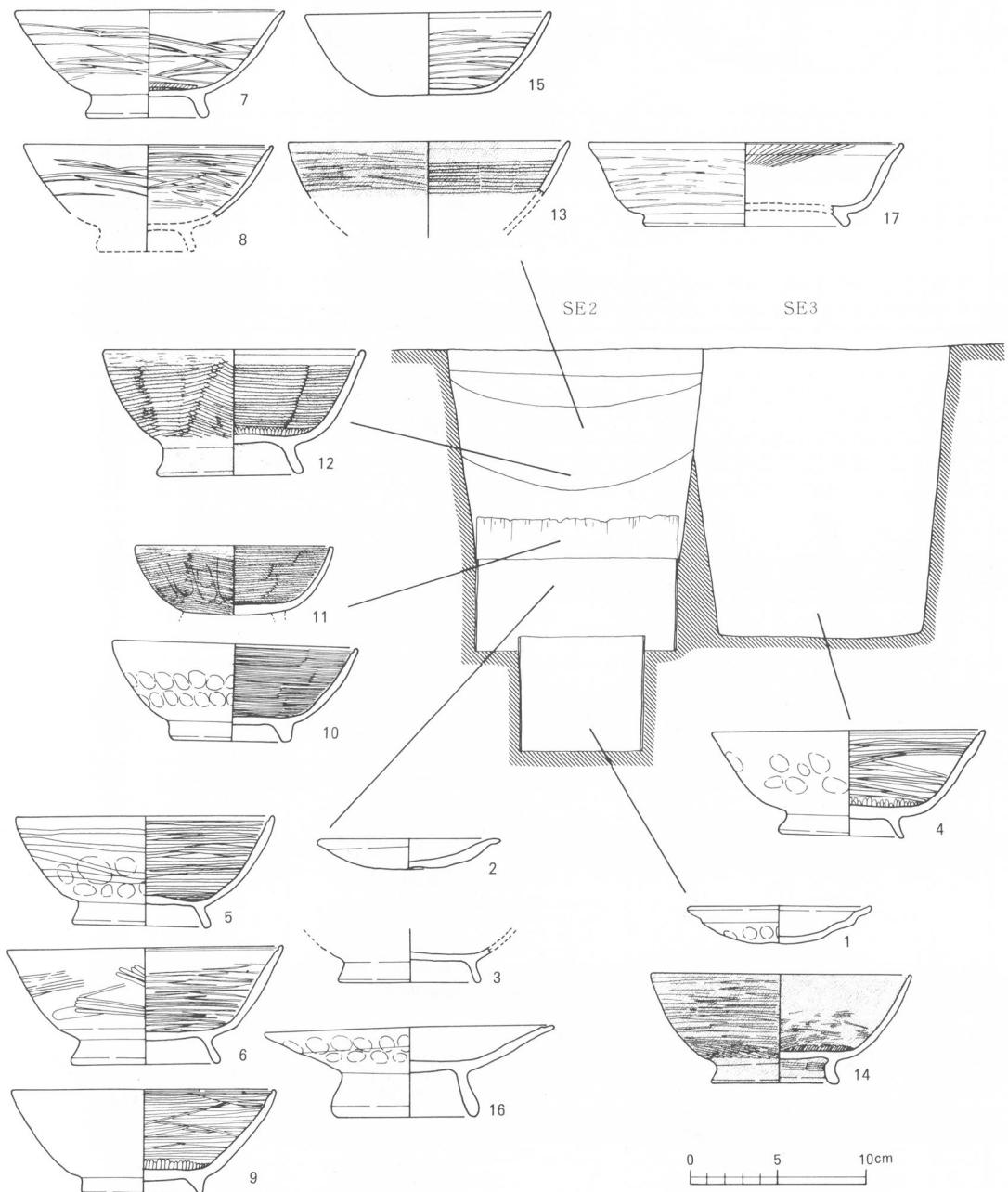


図33 前裁遺跡（第2次）井戸跡2, 3 黒色土器出土位置図

吸着をおこなっている。（8）も内外面とも炭素を吸着させ、ヘラミガキも丁寧である。内面はA類4個と同じ手法をもつ。口縁部には、ヘラで外側からおさえて、くぼみを作り、輪花状にしている。

土 师 器 皿		黑 土 器 A 類	黑 土 器 B 類
前井 裁戸 遺跡 8C末 9C初	1	2	
丹切 古墳 群 34 号 墳 9C 前半		3 4 5 6	7 8
平北 城郊 京井 左戸 京 5 条 9C後半	9 10	11	
平井戸 京 1 左 京 六 条 三 坊 十五 坪 10C 前半	12 13	14 15 16	
平十三 城 京坪 左 井戸 京 六 条 跡 三 坊 10C 中 後 半	17 18 19	20 21	22



図34 奈良県内出土黒色土器の編年案

	土 師 器 皿	黑 色 土 器 A 類	黑 色 土 器 B 類
薬井 師戸 寺48 10 C 末 11 C 初	23 24	25	26
前裁 遺跡井戸 2・3 10 C 末 11 C 初	27 28 29	30 31 32	33 34 35
縫向 遺跡井戸 6B 11C前半 中葉	36 37		38 39 40
平十三 城三 京坪 左井 京戸 六14 条三 坊 11C中	41 42 43		44 45 46 47
法井 隆戸 寺 1230 11 C 末	48 49	50	51 0 10 cm

9世紀後半 平城京左京二条北郊 井戸跡5
(文献2)

黒色土器A類の杯(11)である。内面に炭素を吸着させている。外面は口縁上部を除きヘラケズリを施し、内面は底部に平行のヘラミガキ、口縁部に横方向のヘラミガキを行い、その後、口縁内面の3か所に渦状暗文、底部内面に螺旋状暗文を配している。このほか、土師器皿(9・10)、小形の須恵器壺が出土している。

10世紀前半 平城京左京六条三坊十五坪 井戸跡1
(文献3)

黒色土器A類の椀3個(14~16)が出土している。内面に炭素を吸着させるもので、いずれも高台をもち、口縁端部内面に沈線を一条めぐらす。内面は底部に並行のヘラミガキをおこなう。(15)の口縁部内面には3か所に渦状暗文を配している。外面はヘラケズリの後、簡単にヘラミガキをし、(14・16)には底部外面にもヘラミガキをおこなっている。このほかに土師器皿(12・13)、灰釉陶器皿が出土している。

10世紀中頃から後半 平城京左京六条三坊十三坪 土坑21
(文献4)

黒色土器A類の椀(20・21)と、B類の椀(22)が出土している。(20)は、半球状の体部に外方へ張る高い高台をもち、(21)は平底を呈し、断面三角形の低い高台を貼り付けている。ともに内面を密にヘラミガキし、底部に平行ジグザグ状のミガキを施す。(22)は、薄手の器壁をもつ。このほか、土師器皿(17~19)、黒色土器A類の壺、土師器甕、灰釉・緑釉陶器が出土している。

10世紀末から11世紀初頭 薬師寺 井戸跡48
(文献5)

金堂跡の調査の際、検出されたS E48から西僧房出土の土器群より一型式新しい黒色土器A類(25)、B類(26)、土師器皿(23・24)が出土している。

前栽遺跡井戸跡2, 3

詳細は本文中19頁から24頁を参照。

11世紀前半から中葉 纏向遺跡 井戸跡6 B
(文献6)

黒色土器が5個体あり、いずれも全面をいぶす。(39)と(40)は、ヘラミガキが太く、見込みには菊花状の暗文を施す。外面ヘラミガキもほぼ全面にあり、3分割されている。(38)は、見込みに平行線状の暗文を施す。外面ヘラミガキは3分割されている。このほか、土師器皿(36・37)、瓦器が出土している。

11世紀中頃 平城京左京六条三坊十三坪 井戸跡14
(文献7)

黒色土器B類の椀(44~47)が出土している。(47)を除き小椀で、器径9.0~10.3cm、器高3.8cmを測る。口縁内面に一条の沈線を施すもの(44・47)がある。内・外面ともヘラミガキは密で、内面底部のミガキを施すもの(39)と、平行ジグザグ状に施すもの(45・47)がある。このほか、土師器皿(41~43)が出土している。

11世紀末 法隆寺 井戸跡1230
(文献8)

黒色土器A類とB類があり、各1点出土している。A類の椀(50)は、口径16.1cm、復元高5.5

cmで、口縁内面端部直下に浅い沈線をめぐらす。外面をヘラケズリしたのち、内外両面にヘラミガキを施す。B類の椀(51)は、口径16.4cm、器高6.2cmで口縁外面に4回に分けて横方向のヘラミガキを施す。底部外面・高台部には、ミガキを施さない。このほか、土師器皿(48・49)、土師器椀、鍔釜、瓦器、灰釉陶器が出土している。

以上、奈良県内における黒色土器を、時代別に出土地及び土器観察を記述した。黒色土器は、調整方法や、細部の形態がバリエーションに富んでいるため、調整変化や細部形態では型式分類が困難である。しかし、各時代を通じて器形変化がみられ、これは黒色土器の窯業生産の変化に影響されていることがわかる。^(文献9)以下、黒色土器出現から消滅までを大きくⅠからⅣ期に分け、それぞれ記述する。

Ⅰ期 黒色土器A類が出現する8世紀初頭から9世紀初頭までとする。8世紀代の黒色土器は、同時期の土師器と同じ器形に黒色処理しているもので、黒色土器特有の形態はなく、土師器工人による生産だと考えられている。事実、器形は土師器と酷似し、底部面積が広く、外開きの体部をもつ。^(文献10)口径が広く、器高は低い。この器形に内面黒色処理を施している。B類は出現していない。

Ⅱ期 9世紀前半から10世紀前半までとする。9世紀になると黒色土器の器種も増し、供膳・煮沸・貯蔵器の什器セットを構成するようになる。B類が出現し黒色土器工人による生産となる。^(文献11)器形は、高台付の椀が増加するが、奈良時代の杯の器形形態を残した底部面積の広い、体部が外開きの形態を呈している。体部内面には輪結状暗文を施している。前栽遺跡井戸跡4出土の黒色土器A類の杯は、この特徴を強くもっている。また、高台付の椀は、高台が簡略的小形の逆三角形を呈している。あたかも杯に高台を貼り付けたかのようである。この特徴は10世紀前半まで残る。

Ⅲ期 10世紀中頃から11世紀初頭までとする。杯・皿・鉢・甕等の器種が完全に消滅し、椀・皿が主流となりB類も量的に増加を見せ、器種は椀・皿に限定される。器形は、体部が中央で丸味を帯び、器高も高くなる。^(文献12)10世紀末から11世紀初頭は黒色土器椀の隆盛期とも言える完成度の高いものとなる。前栽遺跡井戸跡2、3や、薬師寺井戸跡48の出土遺物が代表的な資料である。器形は底部面積が狭く、体部は底部脇で角く張り出し、外開きに延びる。高台も大振りでしっかりした形態をもつ。器高は高く、口縁径が狭い。

Ⅳ期 11世紀前半から11世紀末までとする。黒色土器の製作技術を踏襲した瓦器が出現し、黒色土器と共に伴する。底部面積が狭く、体部はゆるやかに外開きになる。器高が低く口縁径が広い。高台は幅広いが、退化形態を呈する。

以上、大まかではあるが、黒色土器の形態分類を試みてみた。黒色土器A類は8世紀初頭に出現し、B類は9世紀前半に出現して11世紀後半まで共伴して存続する。この約四世紀間に、黒色土器の窯業変化とともに、器種、器形も変化をみせることが判明した。土師器の器形に黒色処理を施す第Ⅰ期を経て、供膳・煮沸・貯蔵器の什器セットを構成し、B類の出現を見せる第Ⅱ期を経る。器種は椀・皿に限定されるが、技術的に隆盛期を迎える第Ⅲ期を経て、器形形態や調整法も徐々に退

化し、瓦器の出現をみせる第IV期となる。こうした形態変化を今後の発掘資料の増加を待って、細部の特徴および調整法と兼ね合わして再度検討したい。

(参考文献)

- 1 『宇陀・丹切古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第30冊 奈良県教育委員会 1975
- 2 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 奈良市教育委員会 1983
- 3 同 上
- 4 同 上
- 5 報告書未刊行のため、図は川越俊一氏の『大和地方の瓦器をめぐる二、三の問題』から転用した。
- 6 『纏向』 桜井市教育委員会 1976
- 7 注2と同文献
- 8 『法隆寺発掘調査概報I』 法隆寺 1982
- 9・10・11・12 異 淳一郎「古代窯業生産の展開—西日本を中心にして—」(『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』) 奈良国立文化財研究所 1983

第2節 木製匙について (図35)

井戸跡4より出土した木製匙は、木理を巧みに生かして製作されたもので、これまでに出土している木製品とは大いに趣を異にしている。日本在来の食事具の中では、匙形は主流とならなかつたようで、考古遺物としての類例に乏しい。

比較検討の資料としては、むしろ正倉院に所蔵されている金属製匙や韓国慶州市雁鴨池出土の青銅匙などと比較して、系譜関係を推定することが必要であろう。
(文献2)

まず、井戸跡4の匙の要点だけを示すと、匙面長8.5cm、幅3.9cm、柄長22cmである。匙面は楕円の木葉形を呈し、柄部は頭部で少し広がる。また、柄部中央部を山形に稜線をつくり、先端は八字形を呈している。側面観は、匙面と柄部が135°の角度をつけて、柄部が直線的にのび上がっている。

正倉院南倉に所蔵されている金銀匙(南倉43)と、佐波理匙(南倉44)についてみる。金銀匙は、銀造鍍金で、匙面が木葉形をしている。総長29.7cm、匙面長7.8cm、柄長22.2cmあり、匙面には金敷の上で細かく鎚打した跡があることを報告している。佐波理匙は、匙面長8.2cm、幅4.95cm、柄長16.5cm、幅1.9cmである。その特徴は「匙面は木葉形で、上面中央に葉脈を線刻している。柄は幅がやや広く、柄と匙面の角度は

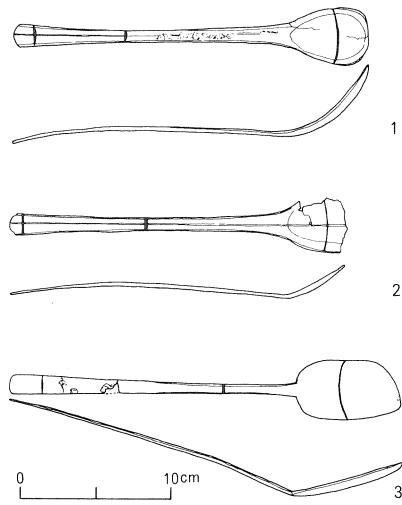


図35 韓国統一新羅時代の匙
1.平山山城里 2.扶余扶蘇山 3.陰城美谷里